

長寿・超高齢社会に心理学は何をすべきか

日本大学 名誉教授

長嶋紀一（ながしま きいち）

高齢者を対象とした研究との出会いは、1966年4月のはじめでした。たまたま社会福祉法人浴風会の浴風会病院（当時は浴風園付属病院）の医局所属の研究嘱託として勤務することになったときでした。それまでは小保内虎雄先生のご指導のもとで、感覚・知覚・認知・記憶などの基礎領域の研究が中心でした。病院長の尼子富士郎先生からは、「養護老人ホーム浴風園の新入所者の処遇に役立てたいので、知能検査と性格検査をしてください」とのご指示がありました。

しかし、それまで高齢者のことも、養護老人ホームのことも、ましてや浴風会病院のようないわゆる老人病院のことも、全く知らないばかりでなく、高齢者福祉や高齢者医療についての知識や経験も皆無であったこともあり、戸惑いを感じたことを今でも思いおこします。当時は心理学の領域から高齢者を対象とした研究に興味・関心をもつ研究者は少なく、高齢者の心理学的研究に関する文献もほとんどない状態でした。

そうはいつても、高齢者や老化への心理学的な関心は、人類が地球上に存在しはじめたときからの重大で古い問題であり、記録に残されているものをたどれば、ギリシャ・ローマ時代にまでもさかのぼることができます。高齢者および老化に関する研究は、米国において急激に進展しました。その背景には高齢人口の急激な増加による年齢構造の変化が社会問題にまで発展したためと考えられます。そして、1945年にはアメリカ心理学会に第20部会として、成熟と老年部会が新設されました。そして、1970年には老年心理学（Geropsychology）という語がはじめて使われるようになり、人口の高齢化に伴って生じる社会的老化問題に対処すべく、心理学的研究方法により高齢・老化の問題について多角的な研究が進められつつあります。

本邦においても、少子高齢化により、かつて経験のない年齢構造の変化が大きな社会問題となっていますが、心理学的領域からの関心は必ずしも高くはないように思われます。高齢社会においては、老年期が長くなります。具体的には65歳をすぎたからの人生（生命）が長くなります。老年期が長くなると、社会生活、就労、経済、人間関係、老年期特有の心身の疾患など老年期をいかに生きるかが大きな課題になります。

このような現状に臨んで、心理学徒として、超高齢社会、長寿命に対して何らかの貢献を検討してもよいのではないかと考えます。



Profile—長嶋紀一

1964年、日本大学文理学部心理学科卒業。1969年、同大学院博士課程単位取得満期退学。1970年、亜細亜大学教養部専任講師、助教授。1975年、日本大学文理学部助教授、教授。2011年、日本大学名誉教授。専門は老年心理学。主な著書は、『老年期（有斐閣選書）』（分担執筆、有斐閣）、『老年心理学』（共編著、朝倉書店）、『老人百態』（ミネルヴァ書房）、『老人の心理』（共著、全国社会福祉協議会）、『施設介護の実践とその評価：痴呆性高齢者のロングタームケア』（共編著、ワールドプランニング）など。